

令和5年度第1回高松市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和5年7月20日(木) 午前10時00分～午前11時45分

2 場 所 高松市防災合同庁舎3階 301会議室

3 出席者 高松市長 大西 秀人
高松市教育委員会教育長 小柳 和代
高松市教育委員会委員(教育長職務代理者) 吉澤 潔
高松市教育委員会委員 葛西 優子
高松市教育委員会委員 関元 盛夫
高松市教育委員会委員 小方 朋子
高松市教育委員会委員 富家 佐也加

4 事務局

(教育委員会)

教育局長 河野 佳代
教育局参事 一原 玄子
教育局次長総務課長事務取扱 長谷山 隆義
教育局次長生涯学習課長事務取扱 合田 紀子
学校教育課長 山地 芳樹
学校教育課主幹 岡内 秀寿
教育局総務課長補佐 春日 布三
生涯学習課長補佐 古沢 伸之
教育局総務課総務係長 別所 里美
教育局総務課総務係副主幹 香川 有美子
教育局総務課総務係主事 道久 拓元

(市民政策局)

市民政策局長 蓮井 博美
地域政策部長コミュニティ推進課長事務取扱 大比賀 孝
政策課主幹 多田 也寸志
政策課長補佐 吉田 幸弘
政策課企画担当課長補佐 宮武 伸宇
政策課企画担当課長補佐 齋藤 直樹
政策課企画員 池見 渉

(創造都市推進局)

創造都市推進局長	中川 昌之
文化・観光・スポーツ部長文化芸術振興課長事務取扱	次田 吉治
文化財課長	川畑 聰
スポーツ振興課長	高尾 昌伸
美術館美術課長	中北 浩之
文化芸術振興課長補佐	本多 広実

5 傍聴人 4人

6 協議事項

- (1) 地域と学校との協働体制の強化について
- (2) シビックプライドの醸成につながる教育の推進について
- (3) 文化・スポーツ施策の推進状況について

7 議事の経過

【開会】

○ 事務局（教育局長）

ただ今から、令和5年度 第1回 高松市総合教育会議を開会する。

本会議の進行については、高松市総合教育会議運営要綱第4条第4項に基づき、市長が行うこととなっているので、お願い申しあげる。

【市長挨拶】

○ 市長

それでは、私の方で議事を進行する。

この総合教育会議は、御承知の通り、地方教育行政法に基づき、市長と教育長、教育委員会委員がメンバーとなり、意思疎通を図りながら、本市の教育の課題を共有し、それより一層民意を反映した教育行政を推進していくために開催しているものである。

昨年度は、「ヤングケアラーへの支援」、「部活動の地域移行」等について議論を行った。

本日は今年度第1回目の総合教育会議となるが、「地域と学校との協働体制の強化」、「シビックプライドの醸成につながる教育の推進」、「文化・スポーツ施策の推進状況」、この3つの議題について協議を行うことにしている。

まず、協議事項1の「地域と学校との協働体制の強化について」生涯学習課長から説明をお願いする。

【議題（１）地域と学校との協働体制の強化について】

○ 事務局（生涯学習課長）

（「地域と学校との協働体制の強化について」説明。）

○ 市長

ただ今の説明を受け、課題や今後の対応等も含め、御意見等はあるか。

○ 委員

今回、御紹介いただいた例と聞き取り調査を行った対象は小学校である。今後の取組として小学校を中心とした地域学校協働活動を主として予定されているのか。中学校についてはどのようにお考えなのか。

○ 事務局（生涯学習課長）

小学校にアンケートと聞き取り調査を行った。まずは、小学校からこうした体制でコーディネーターの方を置いて進めていきたい。中学校の聞き取り調査はこれからとなる。地域との関わりというところで、小学校から始め、次の段階で中学校を考えたい。

○ 委員

学校運営協議会は、以前から非常に大事なものだと思っており、是非活性化してもらいたい。なぜなら、学校が必要なこと、してほしいことを地域の人や協力団体と意見交換をして、相互協力ができるということで、地域の活動をしている人も、学校運営協議会の内容に包含される活動が多いのではないかと思う。その結果、地域の各団体も、協力することで横のつながりができることが非常に大事なことであり、学校・地域にとっても、非常にいいことづくめと思う。地域の団体も、少子高齢化、また、コロナ禍を経て、担い手不足、人材不足であり、是非この学校運営協議会が発展して、地域の横の連携ができれば非常に良いと思う。

○ 事務局（生涯学習課長）

既にコーディネーターがいる学校もあるが、これからコーディネーターの方を人選し、コーディネーターの方にもその学校運営協議会のメンバーとして参加していただき、地域とのつながりをより強化していく方向で進めていければと思う。

○ 市長

学校運営協議会が、高松型ということで全学校に設置されているが、例えば中核市の状況から、全学校にあるのは非常に進んだ状態若しくは普通の状態なのか、あるいはこういう工夫がもっと必要だということで考えているのか教えてほしい。

○ 事務局（学校教育課長）

データを持ち合わせてはいないため一般論になるが、全ての学校ということについては、比較的進んでいるところではないかと認識している。

ただ、学校運営協議会自身は、令和5年度からコミュニティ・スクールによる学校運営協議会制度に、高松市では切り替えたというところではある。

○ 委員

コミュニティ・スクールになると、子どものシビックプライドの醸成に非常に役立つこと、そのためにはコーディネーターが必須であることもよくわかるが、1つ曖昧になっていると思うのが、コーディネーターは誰が見つけてきて、誰が任命するのか。学校が近隣から探してきて、コーディネーターとして養成するのか。それとも周りから自薦他薦で出てくるのか、あるいは市がコーディネーターを選ぶのか。コーディネーター養成の道筋が明らかにされてないので、なかなかコーディネーターが増えていかないのではないかと。

○ 事務局（生涯学習課長）

コーディネーターについては、今は学校の校長先生や教頭先生に、そういう方がいるかお伺いしている状況である。聞き取り結果では、既に地域で活動している団体の方、元PTA会長、元教員、コミュニティセンターの職員の方などを想定していると返事をいただいている。学校によっては、具体的に検討していないところもあるが、やはりコーディネーターは、地域に広く人脈を持った方で、学校の現状にも詳しく、理解してくださる方が望ましいと考えているので、そうした方の人選が必要だと思っている。

○ 委員

誰が探してきて誰が任命するのかということをお聞きしたい。

○ 事務局（生涯学習課長）

今の段階では、学校に聞いているという状況である。一般の方や地域の方で、私がやりたいという声は、まだ把握はできていない。

○ 市長

今のところ学校任せということなのか。

○ 事務局（生涯学習課長）

学校に聞いているのみである。

○ 市長

本当にいい人が確保できればいいが、確かに言われるように簡単には見つからないと思われる。教育委員会の方もバックアップ体制をとりながら、学校を指導して、きちんといい人が見つかるような形で、進めていくべきだと思う。

○ 委員

去年までは高松型学校運営協議会、その前は学校関係者評価委員会があったため、どちらかといえば学校を評価するというイメージが委員さんの中にはある。今年から学校運営協議会になり、体制が変わったことが、地域コミュニティにはまだ浸透していないと思われるので、もう少し丁寧に地域の方にも説明をしていただいたらいいのではないかと。

地域学校協働活動は、地域のいろいろな団体が関わっていることから、協働体制はもう既に構築できているところが多い。他に何が必要かなと考えると、やはり学校は開かれた学校で、例えば参観や行事、先ほどモデル校の授業でもあったが、どんどん発信していく。地域の人に学校に来ていただき、学校が活動している様子をしっかりと見ていただくのが大切である。一方、受け皿となる地域は、高齢化が進んでおり、人材の発掘がとても大変である。隠れた人材の発掘を考えると、中学生、高校生、大学生といった子どもたちにも活動に参加してもらうことで地域を盛り立てていくような、最終的にその地域コミュニティの再生に向かっていくことも大事ではないか。そのためには、コーディネーターは大切な存在だと思うので、学校も地域も納得してお願いできる方を見つけてほしい。

○ 事務局（生涯学習課長）

学校運営協議会については、地域のコミュニティ協議会や団体の方に、今後の地域と学校との連携・協働体制について、説明する際に丁寧に説明をしていきたい。

コーディネーターが、地域の団体同士をつないでいくという役割を持っているが、地域間のネットワークが緩やかに形成されていくことが望ましいと考えている。全てを網羅していくことは難しいかもわからないが、今地域で活躍している方や多方面に声をかけさせていただいて進めていければと思う。

○ 委員

地域学校協働活動が活性化することがとても良いことであるとか、コーディネーターの存在が核になるのがよくわかった。ただ、立ち上げにしても維持するにしても、どうしても学校側の負担を、教頭先生、校長先生は大変なのではないかとも感じる。地域をブロック化するとか、先ほどは小学校単位だったが、中学校区にするといくつか小学校も含まれる。コミュニティセンターや、今とても頑張っておられるまなびCANが何か主体的にするなど、小学校だけでなく他が主体的にできる活動がもう少し増え

てもいいのではないか。

もう1つは、人を巻き込むというお話を皆さんされていたが、我が身を振り返っても、自分の子どもが小・中学生のときは余裕がなく、PTA 活動もほとんどできなかったが、50代、60代になると少しは余裕が出てきて、地域のこともできる気はするけれど、もうつながりがなくなっているということで、やはり50代、60代の人たちや元PTA会長なりとつながりを持って、違う世代の人を巻き込む方法がないのかと思う。

民間企業の方でも働き方改革が進んでいて残業がないとか、その分、趣味だとかジムに通うなど、そういう形になっていると思う。そこを月に1回、週に1回は「地域学校協働活動の日」というキャンペーンをすとか、県も入っていただき、できないだろうかとも思った。民間の会社も社会貢献活動として、地域の学校に何か活動するのを1つ考えていただく、そういう働きかけもあればありがたい。

○ 事務局（生涯学習課長）

学校側の負担については、今は地域の方との窓口となっているのは、教頭先生の場合が多く、業務の負担が大きくなっているのが現状である。ある学校では、地域連携担当として若手職員を配置しているところもあり、学校全体で地域学校協働活動に対する教職員の意識を高めていくことも重要と思う。

主体的な活動というところでは、コミュニティセンターの職員の方や、センター長が、コーディネーター役をされているところも多くあるので、コミュニティセンターとの関わりというのもこれから大切になると思う。

○ 市長

地域と学校との協働ということで、学校側に負担がより増すと本末転倒になるので、各学校、学校区の事情によるが、地域側にある程度主体性を持っていただきながら体制をとっていくよう、きちんと指導してほしい。

○ 教育長

令和5年度からコミュニティ・スクールということで高松市は正式にスタートした。全国的に全ての学校でスタートすると、形は整ったが内容が伴っていないという事例も見受けられるが、本市は、これまで高松型コミュニティ・スクールということで緩やかにスタートしたこともあり、学校の方では大きな負担なくスタートが切れている。

学校と地域の連携や協働については、各地域によって進捗状況は異なるが、校長先生方の話では、これまで以上に地域の方々いろんなことをお願いしやすくなり、地域の方も「何でもするよ」と言ってくださり、共に学校と地域が子どもを育てていくという形が整いつつあるというようなお話も伺っている。

例えば、夏休みに運動場が芝生化している学校であったり花壇の水やりなど、いろいろ大変なこともたくさんあるけれど、地域の方がお手伝いや子どもの学習の支援をし

ていただき、一緒に子どもを育てていく体制が整ってきていると思う。

それから、これまで学校教育と社会教育が交わる部分は難しい部分があったが、コミュニティ・スクール、地域学校協働活動により、学校も地域も Win-Win の関係になるのが最も理想的な姿だと思う。

学校の方も、当初は立ち上げに手間もかかり、人間関係をつなぐのに時間もかかると思うが、軌道に乗ると、教員が今行っている業務をたくさん地域の人に担っていただける。例えば小学校高学年では、家庭科のミシンの実習に婦人会の皆様が一緒に授業に入って手伝ってくださるとか、学校の施設のことであっても、おやじの会の方が協力してくださるとか、連携・協働が進むほど、学校は助かっていくのだろうと感じる。

地域学校協働活動については、コーディネーターの果たす役割、学校や地域の立場も理解して下さるコーディネーターの方が見付き、仕組みが整った地域から地域学校協働活動を開始し、今年度からスタートして、徐々に地域を増やしていきたい。

また、生涯学習課に学校で校長をしていた職員を 1 人配置し、その職員が全ての学校をまわりながら校長先生に話を伺い、地域との連携の方法をアドバイスしながら事業を進めている。

今後、教育委員会も市長部局と連携をしながら、地域のコミュニティセンターと学校がつながり活動を進めていきたい。

○ 委員

コーディネーターについては、学校のこと地域のこと、また地域の団体の事がわかっていて、バランス感覚があったリーダーシップがとれる、そんな人を探してもなかなかいないのではないかと思いますので、とりあえず運営していく中で各種団体の中から得意なことをやっていただく人を見つけて作っていく方がいいのではないかと思います。

○ 市長

存在するというのは 5 人、5 つの小学校だけですか。今年度中にかなり増やさなければならぬ。

○ 事務局（生涯学習課長）

昨年のアンケートでは、小学校で 5 人コーディネーターになる方がいるという結果でした。今年度、各学校に聞き取り調査する中で、十数校はコーディネーターの方がいる、候補の方がいるという状況である。

○ 市長

先ほども申しあげたように、教育委員会としてもきちんと体制を整えた上で、良い人が見つかるように人選を進めてほしい。

最初の御説明にもあったように、社会情勢の変化に伴い、学校・家庭・地域の課題が

多様化・複雑化する中で、「こどもまんなか社会」という考え方の下に子どもを育てていくというためには、地域と学校との協働体制を強化することが何としても必要だと思う。

教育委員会と市長部局が情報共有しながら、互いに連携をしてそれぞれの学校や地域の実情に合った地域学校協働活動を推進していくということで、地域の活性化やコミュニティの再生などが図られると思う。コミュニティと学校との連携をこれまで以上に強化をしながら、子どもたちを健全育成に導いていただきたい。

そのためのキーとなるのが、コーディネーターの存在であり、また関係者の御尽力ということになるかと思うので、その辺を教育委員会としても全体をバックアップするとともに、個別課題についてもきちんと相談に乗って進めていただきたい。

それでは、協議事項2の「シビックプライドの醸成につながる教育の推進について」に移らせていただく。市民政策局の政策課並びに学校教育課から説明をお願いする。

【議題（2）シビックプライドの醸成につながる教育の推進について】

○ 事務局（政策課主幹・学校教育課長）

（「シビックプライドの醸成につながる教育の推進について」説明。）

○ 市長

ただ今の説明を受け、課題や今後の対応等も含め、御意見等はあるか。

○ 委員

シビックプライドに2つの側面があると資料に書かれており、魅力を発見して発信していく活動も大事だと思うが、それを踏まえた上で、自分たちに何ができるのか、どういうふうに改善していこうか、改善したいのかという方も、重点的に方向づけていくのが大事ではないか。自分たちで良いまちを作っていこう、という気持ちがないと高松に残りたいが大学がない、勤めたいが企業がない、という話になる。高松に帰ってこれない理由があるのであれば、自分たちでそれを作っていこう、改善していこうとか。例えば、お宝を発見をして、これをふるさと納税につながるようにしたい。例えば、市有地をこう活用したらいいのではないかとアイデアを出すなど、それが市政につながるような体験を高松にいる高校生の間までにやっていく方向が大事なのではないか。

○ 委員

何か自分たちでいろんなことを切り拓いていくというか、考えていくというのも大事である。やはり自分たちの住むところを都にしていこうという考え方で関わっていく子どもたちが、地域課題とかに積極的に関わったり、魅力を発信することをどんどんやってもらいたい。

子どもたちは県外に出ていってしまうと、どちらかというとマイナスなイメージが

あるけれども、就職で県外から高松に来る人たちもたくさんいると思うので、そうした人たちに定住とか、途中から高松に来た人たちにも、高松の魅力をどんどん発信していただけたらと思う。

○ 事務局（政策課主幹）

多くの若者が、県外へ流出しており、就職時に一定数は帰ってきているが、20代前半を見るとやはり人口は流出しているというのが現状である。そういった中で、就職をきっかけに県内に来てくれる方も中には一定程度いるのは事実である。そういった方に長く住んでいただく、定住していただくために、やはり高松の魅力を実際によく知っていただくことは大変重要と思う。

シティプロモーションということで、これから本市の方でも取り組んでいこうとしているけれども、県外だけでなく市民の方にも知っていただくようなところも必要かと考えている。

○ 委員

シビックプライドの醸成のための教育というのは、非常に賛成である。

「高松で育ち、高松で学び、高松で暮らして良かったと思える教育」は、高校生まででいいだろう。大学はやはり県外を、むしろどう背中を押すのか、そしてグローバル教育と一緒にやっていく。グローバル化した人格を育てるということで無理に高松に引き留める必要はない。ここを出ても自分が生まれ育った高松に誇りを持ち、いつかは高松に戻りたいという気持ちを持つこと事が大事なのであって、若者の県外流出を人口対策、人口減少の対策とするというのは間違いでないかと思う。

○ 事務局（政策課主幹）

本市の人口の減少の要因に若い方の県外流出が多いことがあることから、地域の魅力向上とか、シビックプライドの醸成で地元への愛着を高めて、1つの方法として県内大学進学者の県内就職につなげる取組が必要と考えている。一方で県外に行って、県外の大学等に進学して、自分の夢を実現していきたい、自己実現を果たしたいという、そういう若者もやはり本市としては大いに応援したいと考えている。県外で身に付けた、いろんな価値観、新しい知見、これらを本市のまちづくりに、県外に住みながらも活用してほしい。

子どもたちには、地元高松に愛着と誇りを持っていただき、将来的に市内外で様々な関わり方で、本市のまちづくりに参画していただきたい。このことが本市としての活力の維持、持続的な発展につながるものと考えている。

○ 市長

大学進学にあたって、何も全て県内に残るべきであるということで抑えることはな

いと思うが、あまりに香川県の場合には、その進学者のうち8割が外に出てしまい、2割が残る。これは、全て学生のお意思であるということであればそれでいいと思うが、問題は、やはり高等教育機関のキャパシティが少な過ぎるというところにも原因があって、もう少し地元で、高等教育機関等の充実を図るべきではないかといったような問題意識を持っており、その点についても少し考えるべきということで問題提起をさせていただいている。

香川県の高校生の定員の4割ぐらしか香川県内の高等教育機関で修了できないということで、必然的にある程度数は外に出ざるを得ないというところがある。これをどうするかというのを考えるべきだということで今、対策を練っているところである。

意欲のある学生についてはもちろん、どんどん県外へ優秀な形で出て行っていただくというのを非常に大事なことでお思っている。

それについて御意見も参考にしながら、今後の計画に反映させていきたい。

○ 委員

高松プライドプロジェクト、高松の魅力発見プロジェクト、非常にいい取組である。基本的には普通に生活すれば、生まれ育った所というのは、好きになるものだと思うので、通常のお家庭教育、学校教育もそうだが、その分別は大事なところである。まさに高松の「誰一人取り残さず一人ひとりが輝く教育」というものを実践すれば、自然にシビックプライドが醸成していくと思われる。不登校も多い中、教職員の方も非常に苦勞されているので、いろんな取組で教育をしていければいいと思う。

○ 事務局（学校教育課長）

日常の活動から大事にしていかなければいけないということがよく伝わった。子どもたちにとって地元はもちろん学校も魅力あるものにしていきたい。

○ 委員

シビックプライドの醸成という面から考えると、自分自身がか関わっている、自分が郷土の未来をつくっているという当事者意識を醸成するというのは大事だ。小学生の間は地域とつながりも多く、地域に十分関わっているという意識があると思うが、中学生になると、地域とのつながりを保つことは難しくなるので、ボランティアとして参加するなど、いろんな機会を与えて自分自身が地域や高松市にか関わっていけるような機会を与えていくことが大事だと思う。

○ 市長

先般、新しい総合計画をつくるということで香川大学生と議論したことがあった。その時にシビックプライドとか言うけれども、特に大事なのは、小学生の小さい頃に地元の故郷の良さを知ってトークとかをするというのが非常に大事だという話があった。

自分たちもそういうのをほとんど知らないで過ごしてきて、今になって勉強して、素晴らしいものが地元高松にあるというのを知って良かったと思っている、と言っていた。特に、そのシビックプライドを持ってもらうという教育というより前に、地元の良さというものを小さい頃から知っていたり知ってもらう、知る、知らしめるといったような教育というのが非常に重要なのではないかという思いであった。

○ 教育長

シビックプライドについては、私が教育委員会でお世話になる前に、市報か何かで、市長がシビックプライドをテーマにした文章を拝見し、教育の世界では、ふるさと教育にずっと長年取り組んできたが、私自身もいろいろ勉強させていただき、高松の子どもたちは、高松の良さをどれほど知っているんだろうと考えた。

実は、小学3・4年生が学ぶ「高松の今とむかし」という、高松市の小学校の社会科の研究をしている教員が作った高松市オリジナルの資料がある。この中には、高松の交通や水道の仕組み、農業や工業や文化、芸術とかが書かれていて、こうした取組を何十年も続けて、小学校3・4年生では、高松という自分たちが住んでいる地域について、しっかり考える機会がある。成長につれて子どもたちの視野が、県全体、日本、世界と広がっていく途中で、自分たちの住んでいる高松に目を向けて、どんなお宝があるんだろうと気づいたり、知ることも大事だと思う。

高松魅力発見プロジェクトでは、何ができるのか学校教育課の指導主事等と一緒に協議した中で、意外と瀬戸内国際芸術祭に行ったことがない子どもたちが多く、自然であったり、歴史、伝統など、実は知っているようで知らないことがたくさんあった。そういうことに、小学生、中学生のうちに目を向けて知ってほしいというのが、1つのこのプロジェクトに込めた思いである。

それから、TPP（高松プライドプロジェクト）をこの夏から実施し、発見した自分の身近にある地域の宝を、いかに国内外に向けて発信するかという力がついている。学校訪問に行くと、ICTを活用した授業では、子どもたちはタブレットを使ってパワーポイントを作り、私達よりも達者で早く上質な内容であった。故郷の見える化、高松市の魅力をしっかり発信できるような子どもたちをこれから育てていきたい。

高松で育ったことを人生の揺るぎない礎としてという表現をよく使わせていただくが、子どもたちがどこで生きようとも、高松に想いを馳せる、高松の発展に思いを馳せる、そういう生き方をしてほしいという願いがある。なかなか難しいことだと思うが、こちらもまた、市長部局の各課の皆様と連携をさせていただきながら進めていきたい。

○ 市長

シビックプライドと直接関係あるのかわからないが、全国調査で自己肯定感が、香川県の小・中学生は非常に低く、全国最下位ぐらいだと出ている。シビックプライドにもつながると思うが、自分たちを卑下して見ているというものに対して、その原因、ある

いは対策というのが何かあれば教えていただきたい。

○ 教育長

香川県全体の課題で、全国学力・学習状況調査に付随する質問紙調査が始まって以来、香川県の子どもは自己肯定感、自己有用感が低いという結果が出ている。

大学の先生やいろいろな方に御相談や御意見を伺ったが、これは学校教育も家庭教育もそうかもしれないが、例えば、家庭で子どもが「お母さん、こんなんできたよ」と持ってきたら、「もうちょっと頑張りなさい」とか、学校ではどちらかといえば、「ここを良くしたもっと良くなるよ」というより「ここができてないね」と、できていないところに着目して完璧を目指そうとする。そういう風土の中で、子どもたちは「まだまだ自分はできてない」と思うこともあるのではないかな。

そうした中で今回、「誰一人取り残さず一人ひとりが輝く教育」を掲げた。子どもたちが自分に対して、「自分はこういう人だと自分のことを理解して、でも自分ってイケてるよね」とか、何か自分に自信を持って、いろんなことを乗り越えて取り組んでほしい。家庭でも子どもにどう声をかけるのか、学校でも教員が授業やその他の場面でどう接していくか、ということが基本的なところではないかと思う。

そうした子どもの自己肯定感、日々の子どもたちとの関わりの中でもそうだが、自分たちの地域についてしっかり発信していく中で、「自分たちは、すごく良いところに住んでる」と思うことが、自己肯定感にもつながっていきけるのではないかと考えている。見方によっては、自分に厳しいということでもあるので、学校教育、家庭教育においても、子どもたち一人ひとりのいいところを伸ばしてあげる、認めていく、そういう風土ができていけばいいと思う。

○ 市長

まち自慢と同時に、やはり自分自慢ができるような、そういう子どもたちを育成していきたいと思う。

子どもたちが自分たちの住んでいる地域や本市の魅力を知ること、ふるさとに愛着や誇りを持って、高松で暮らしてよかったと思ってもらうということが大切である。子どもたちが地域の魅力を発見し、デジタル技術を活用して発信するような様々な取組によって、地元で愛着と誇りを持ち、将来、市内外における様々な関わりの中で市政に関わっていくといったような、ふるさとの未来を支える人材の育成につながるように、教育委員会と市長部局で連携して進めてまいりたい。

それでは、協議事項3の「文化・スポーツ施策の推進状況について」に移らせていただく。創造推進局文化・観光・スポーツ部長から説明をお願いします。

○ 事務局（文化・観光・スポーツ部長）

（「文化・スポーツ施策の推進状況について」説明。）

○ 市 長

ただ今、文化・スポーツ施策の推進状況について、令和4年度の事業実績と今年度の事業予定等の説明があったが、委員の皆様から、事業内容に関する御質問・御意見等はあるか。

ジャパンパラリンピックの開催は、来年度の9月か。

○ 事務局（文化・観光・スポーツ部長）

ジャパンパラについては内定をいただいております、今後、夏頃、8月頃を目途に実行委員会を発足させる。内定し、決定が決まっている。

○ 市 長

それでは、御意見もないので、今後における本市の文化・スポーツ施策については、本日の御説明があったとおりに進めてまいりたい。皆様方の御理解、御協力をよろしくお願ひしたい。

以上をもって、本日予定していた協議事項は全て終了した。その他ということで、何か御意見あればお願ひする。

特にないようなので、進行を事務局にお返しする。

○ 事務局（教育局長）

教育委員の皆様方には、御多忙の中、本市総合教育会議に御協力いただいたこと、心よりお礼申しあげます。次回、令和5年度第2回高松市総合教育会議の開催については、来年2月頃を予定している。日程、議題等については別途調整させていただく。今後とも、御指導、御協力を賜るようお願い申しあげ、閉会とする。